様式第３号

# 会　議　録

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 会　議　名 | | 令和８年度　第１回　川西市社会教育委員の会 | | |
| 事務局 | | 生涯学習部　生涯学習政策課　（内線　2944） | | |
| 開 催 日 時 | | 令和８年７月17日(金)14時30分～16時30分 | | |
| 開 催 場 所 | | 川西市役所　４階　庁議室 | | |
| 出席者 | 委　　員 | 野﨑議長、常行副議長、大谷委員、川野委員、中塚委員、三善委員、河野委員 | | |
| | そ の 他 | テーマに係る担当所管<br>奥野教育保育課長、榎本教育保育課主査 | | |
| | 事 務 局 | 石田教育長、西川生涯学習部長<br>寺田生涯学習部副部長<br>木田生涯学習政策課長、下田主査、鷲尾主事 | | |
| 傍聴の可否 | | 可 | 傍 聴 者 数 | １名 |
| 傍聴不可・一部不可の場合は、その理由 | | | | |
| 会 議 次 第 | | 別紙のとおり | | |
| 会 議 結 果 | | 別紙のとおり | | |

# 審 議 経 過

| | |
|---|---|
| 教育長 | **１．開　会**<br><br>**２．教育長あいさつ**<br>・皆様には大変忙しい中で、委員に就任していただき、感謝する。<br>・社会教育については、令和 5 年度に教育委員会の社会教育課を離れ、今年度からは生涯学習部が所管する。私自身、校長時代に社会教育について勉強するため社会教育主事講習を受けた。<br>・国の流れの中で、社会教育が教育委員会から市長部局に移る例が多くなってきている。善し悪しがあると思うが、その要因の一つは社会教育のハード面について迅速な対応が迫られていること、もう一つは学校教育の肥大化があると考える。<br>・社会教育の視点から学校教育とどうコミットするか、テーマとして一番連携しやすいのではないかということで、前期は「学校運営協議会制度への社会教育の関わり方」について研究いただき、提言もいただいた。それぞれ課題もあるが、学校長、園所長も含めて学校運営協議会で地域と繋がっていくことが重要であると感じている。<br>・今期、審議をお願いしたいのは「探究学習における社会教育の関わり方」である。<br>・現在、国において学習指導要領が諮問され、今年度答申が出ると思う。文部科学省から思い切った答申が出るのではないかと思っており、子どもが主体的に学べるように教科に幅を持たせて学校裁量の自由な時間を作らせようという動きがある。ただ、私自身の経験では、学校に投げても学校がそれをつくる力があるのかというと、まだ難しいのではと思っている。<br>・本市では 3 年程前から、子ども主体の学び、子ども主体の学校運営をしようと 6 つのモデルを提示して取り組んでおり、今年度 3 年目になる。各学校で年間 35 時間から 70 時間で、しっかりとしたカリキュラムを作るようにと言って動き出しているところである。学ぶ内容は教えたけれども、学び方を身につけることが足りなかったという反省が背景にある。<br>・モデルとしては、子どもたちが自分で計画を立てる自由進度学習、台湾の子どもたちと交流しながら外国語や地域について学ぶオンライン交流、劇を活用した学習などがある。台湾については、学校同士の関係ではなく、教育委員会として、自治体としてしっかり締結しようと進めている。これらの一つの大きな柱になっているのが探究である。<br>・高校ではすでに取り組んでいるが、子ども自らが疑問を持って、その学び方を知って、サイクルで学んでいくということをしている。いろいろな学校の取り組みを見ると、地域の課題について学ぶ流れと、子どもの興味を深掘りする流れの二つに大きく分かれると思っている。 |

| | |
|---|---|
| | ・教科書外のいろいろな知見をタブレットだけではなく、いろいろな人たちと触れあっていく中で学びを深めることができればいいと思っている。教える教えられるではなく、地域の方もそれによって学びが深まればいいと考え、このテーマを設定させていただいた。<br>・本日は担当から、どのように学校園所に子ども主体の学び、探究的な学びを提言しているか説明させていただく。<br>・私自身が社会教育を勉強したときに、学校教育は良いところもたくさんあるが、社会教育から見ると一方的に見えるのかと、ある意味衝撃を受けた。どこへ行っても同じ学習が同じようにできるというメリットもあるが、子どもが学ぶ主体としてきちんと確立されているかというと、教える教えられるという関係に陥ってしまっているところもあった。そういう意味で社会教育委員の皆様から、いろいろな提言をいただくことで何かきっかけになればと思っているので、よろしくお願いする。 |
| 事務局 | **３．委嘱状交付**<br>委嘱期間は令和８年６月１日から令和10年５月31日まで（2年間）<br>自己紹介の前に野﨑委員が令和８年度兵庫県社会教育委員協議会総会において社会教育振興の功績を讃えられ、兵庫県社会教育委員等表彰を受賞された旨を報告する。 |
| 出席者全員 | **４．自己紹介**<br>社会教育委員、教育長、テーマ担当所管及び事務局について自己紹介を行った。 |
| 事務局 | **５．議　題**<br><br>**(1) 議長・副議長の選出について**<br>任期は、令和８年６月１日から令和10年５月31日までの２年間。<br>委員の中から議長・副議長について、事務局から「正副議長（案）」について提案がなされ、議長は野﨑委員、副議長は常行委員に就任いただくことが承認された。 |
| 事務局 | **(2) 各協議会等役員の選出について**<br>事務局より、各協議会等役員の選出について事務局案が提案された。人権教育協議会理事については、川野委員、図書館協議会委員については、中塚委員と三善委員、阪神北地区社会教育委員協議会の理事に野﨑議長と常行副議長で承認された。<br>また、阪神北地区社会教育委員協議会の理事は、兵庫県社会教育委員協議会の代議員にも就くこととなる旨の報告を行った。 |
| 事務局 | **(3) 社会教育委員に係る会議等の日程について**<br>事務局より、令和８年度会議日程スケジュール（案）について、阪神北地区社会教育委員協議会、兵庫県社会教育委員協議会、近畿地区社会教育研究大会及び全国社会教育研究大会について、現時点で分かっている日程、会場及び内容について説明 |

| | |
|---|---|
| 担当所管 | がなされ、8年度については、近畿地区社会教育研究大会が全国社会教育研究大会と兼ねるほか、全国社会教育研究大会の分科会において兵庫県の阪神北地区社会教育委員協議会が発表することになり、川西市も一部を担うこととなる旨の説明を行った。また、川西市社会教育委員の会日程について、今後の協議の進捗によっては開催時期や開催回数が変更になる旨の説明がなされ了承された。<br><br>**(4) 今期の研究テーマについて**<br>今期の研究テーマは、「探究学習における社会教育の関わり方」とし、担当所管より本市の教育の取組状況や探究学習について、説明がなされた。<br><br>＜担当所管からの説明＞<br>QUESTは、川西市が力を入れていきたい取り組みを頭文字に掲載したもので、シェアやエンゲージなど社会教育の観点から繋がる部分も多い。探究学習はクエスチョンQに関係する。一昨年度に川西市教育大綱をベースにデザイン化したものであるが、この中身だけでは各学校園所が何をしているか掴みきれず、市内の取り組みをもう少し詳しく知りたいという声があった。そこで、更に具体的な実践にまとめたものがQUESTレポートであり、川西市のホームページにも掲載している。校長にも協力いただき、各学校園所が力を入れている取り組みと、事務局の取り組みも掲載している。<br>次に、次期学習指導要領について説明する。現在、中央教育審議会において議論が活発に行われており、おそらく今年度中に答申が示される予定で、令和9年度に周知、それから順次改定という形になっていく。<br>基本的な考え方としては、主体的、対話的で深い学び、多様性包摂、実現可能性の確保の3つを柱としており、特に「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む」ということが大きな考え方として示されている。<br>その柱となるのが『「好き」を育み、「得意」を伸ばす』、そして「当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」という力であり、その土台となる部分が、今回研究テーマとしていただく探究学習になる。各教科の学びは学習指導要領の中である程度内容が決まっているが、探究は課題を自分たちで考えたり、地域や学校の実情に応じて設定する中で子どもたち自身が学びを深めていくものであり、普段の学校教育の活動と自分たちの生活や身の回りのことを繋げながら学びを深めていく材料になると考えている。<br>また、探究的な学びは小学校、中学校、高校と個別に行うのではなく、幼児期の遊び・学びから経験を深めて繋ぎ合わせていくものとされている。高等学校では総合的な探究の時間となっているが、小学校や中学校では総合的な学習の時間の中で取り組んでいる。<br>本市でも国の動きを把握しながら、QUESTに子ども主体の教育・保育の推進を一つ目に掲げ、従来の一斉講義型の授業ではなく、子どもたち自身が問いを持って学び方を学ぶ学習を取り入れていきたいと考え、現在3年目を迎えている。 |

| | |
|---|---|
| | 子どもたちはVUCAと言われる時代に入っていく。GIGAスクール構想で一人1台の端末を持ち、大人よりも早く情報を得て、自らのペースで進む社会になってきている。さらに生成AIが台頭し、子どもたちは常にチャッピー（生成AIのChatGPT）とやり取りをしている状態が日常化している。ChatGPTで2030年の働き方を聞くと、単純作業は自動化されAIが活躍する一方、人間でないとできない部分として問題解決能力、コミュニケーション能力、創造力といったスキルが求められると示される。<br>これまでの一斉授業型が必ずしもこういったものを育てられないわけではないが、このままで問題解決能力やコミュニケーション能力がしっかりと育っていくのだろうかという問題意識を持っており、これからの学校教育をもう一度見直していこうと取り組んでいる。教師から多くの知識を学ぶだけでなく、子どもたちが自ら考え、自己選択、自己決定することができること、自分に合った学び方がわかるような学びを取り入れていきたいと考えている。<br>また、子どもが学校園所の運営に関わっていける機会も確保したいと考えており、本市ではこども・若者参加条例も制定している。学校園所に対しても、アンケートや直接の意見交換により、例えば校則について子どもたちが考える意見を対話しながら作り上げていってほしいと伝えている。教育委員会としても市長、教育長が各中学校に出向いて意見交換をする機会を4年間続けており、昨年度からは各中学校に少額であるが予算を配分し、その予算を子どもたちが考えて活用する取り組みを行っている。<br>環境面についても、探究学習や子どもたちが主体的に学ぶ学習環境を整備するため、黒板に向かって前を向くという今の環境だけではない教室環境も整えていきたいと考えている。全国的には東洋大学の長澤悟名誉教授が示されているラーニング・コモンズのような事例もあり、いろいろな学び方ができる環境整備を進めている。<br>5つのモデルを示して子ども主体の学びを進めており、その一つ目に探究的な学習を示している。他にも、自由進度学習や異年齢の学習、海外との国際交流や劇を活用したものなどがあるが、各学校で特に取り組まれているのが探究的な学習である。<br>子どもたちが主体的に学べるためには、子どもが選択できる機会や自分で調整できる機会があることが大事だと思っている。実際に、小学校5年生の社会の学習で自由進度学習に取り組んでいるが、動画、絵本、教科書といった教材を紹介されると、ある児童はずっと動画を見てポイントをノートに書いている。今までは教師の板書を写すということであったが、写す作業よりも子どもたち自身が自分で選択することによって黙々と取り組む場面が見られる。また、ペアで学んだ方が学びやすい子どもは自分でペアを見つけて互いに伝え合いながら取り組んでいる。国語と理科を同時に自由進度学習で行い、自分の得意不得意に合わせて時間のかけ方を変えていく取り組みもある。<br>40人での一斉授業では5時間目ぐらいになるとぼんやりする児童もたくさんいるのが現状であるが、自由進度学習や探究学習では自己決定、自己調整できる時間 |

| | |
|---|---|
| | となり、寝ている子どもは本当にいない。自分たちなりのペースで考えることができるので、責任感をもって取り組む時間が増えてくると感じている。<br>ただ、子どもたちに委ねるということは、教師が何もしないということではなく、支援をする必要があると思っている。教師には、どうやって子どもに教えるのかではなく、子どもはどのように学び育つのかを考えていこうと伝えている。子どもたちの学びの原動力は、なぜと思うことから始まるので、疑問に思えるような機会を作り、やってみたいを引き出すような学び方ができるようにしていきたい。子どもたちに教材や順番、課題について自己決定、自己選択できることを掲げているが、そこには教師の指導性や支援が重要であり、子どもたちの主体的な活動には必ず教師など大人の願いや思いがあって、それが共に主体となって進めていくことが重要であることを教師には伝えている。<br>次に、探究学習とはどういうものなのか説明する。探究学習は、文部科学省から日常生活や社会について自らの課題を設定し、課題解決を発展的に繰り返し、物事の本質を探っていく学習方法と示されている。文部科学省の冊子には探究のプロセスとして、課題を設定し、情報収集をし、整理分析し、まとめていくという流れが示されており、その各課題をつなぎ合わせてプロセスにしていくことが探究学習と言われている。<br>学校教育でも何かテーマを決めて調べて新聞や報告書にまとめることはこれまでも取り組んできているが、それをさらに深めていくところが探究学習の大きな違いだと思っている。サイクルを回すとよく言うが、調べてまとめたら終わりではなく、その調べたことから次の疑問が生まれて繋がっていくというサイクルが回っていくことを探究学習と位置付けている。<br>この探究的な学びは、まさに人間が得意とするところの力によくマッチングしていると文部科学省の資料に示されている。さらに、全国学力・学習状況調査の結果では、探究的な学びに取り組んでいる児童・生徒のなかで、課題解決に向けて自分で考え、自ら取り組んでいると答えた割合が高く、また地域をよくするために何かをしてみたいと思う割合も高いという傾向がここ数年で分かってきたと言われている。こういうところからも今後の議論の参考になると思い、紹介させていただいた。<br>最近のトピックスとして、令和８年７月３日の日本経済新聞の記事によると、次期学習指導要領では総合的な学習が小学校も中学校も総合的な探究の時間になると文部科学省の方向性として示された。つまり、探究が土台になることは間違いないと思うところである。<br>私自身も探究について学ぶために視察に行った。石川県加賀市の中学校では地域課題をテーマに各生徒が自分でテーマを決めて探究を行っていた。片山津は温泉地であるが観光業が廃れてしまい、これを復興させたいといって地域課題の探究に取り組んでおり、ある生徒は地域の農園で売り物にならない型崩れの梨を貰ってきて家庭科室で調理し、試行錯誤の末に梨ジャムができて、最終的に販売にまでこぎ着けたと聞いている。 |

| | |
|---|---|
| | また、横浜の学校ではクラス探究と言って、そのクラスで今年１年間のテーマを決めて探究活動に取り組んでいる。テーマに対して国語、算数、社会などとの繋がりを整理した表を教師が作っており、教科との繋がりも整理しながら探究をするというやり方もある。<br>少し有名なところでは、東京都渋谷区がシブヤ未来科という新しい教科を自治体独自に作って探究を行っている。ここも視察に行ったが、子どもたち個人でテーマを決めて、自分の調べたいことにとことん探究していくという個人探究に力を入れていた。<br>いろいろな方法があるが、ポイントになるのは、一つの課題に対してまとめまでいって終わりではなく、それが次の疑問となって、次の課題が生まれて、どんどん深掘りしていくことだと思う。<br>どういう課題を設定するのかとよく聞かれるが、文部科学省の資料では空間軸と時間軸と立場軸で考えるとよいと言われている。空間軸は、この学校ではこういう課題がある、では川西市ではどうなのだろう、全国では、世界ではどうなのかと空間を広げていく考え方である。時間軸は、昔はこうだった、今はこうなった、未来はどうなるのだろうという時間で見る考え方で、立場軸は、子どもはこう思っているが大人はどうなのだろう、保護者はどうなのかと立場を変えて考えるやり方である。このように、いろいろな問いの立て方を考えて課題を設定していく。要は、調べ学習から探究にするためには、サイクルを回していくということが重要になってくる。<br>つまり、次期学習指導要領を見据えたときに、子どもたちが「好き」を育み、「得意」を伸ばすという点と「当事者意識を持って自分の意見を形成し、対話と合意ができる」という力を育てていくために、一番の要になってくるのが探究学習であると捉え、川西市の各学校において取り組みが進められているところである。説明は以上となる。 |
| 議長 | 委員の理解にもバラツキがあると思うが、川西市の各学校では、今どうなっているか。 |
| 委員 | 本校（中学校）では、主体的な学びの内の探究学習を中心に取り組んでいこうと考えている。これまでは、調べてまとめて終わりという調べ学習で終わっていたところを、教師なりに考えて各学年毎にテーマを設けて、例えば１年生であれば学校の身近な問題、２年生であれば地域、３年生になればもう少し視野を広げて川西市という形で今年度はグループ単位で探究をしている。<br>中学校は教科毎の授業なので、小学校と違って総合的な学習の時間で、しかも限られた時間の中でやっていかなければならない。そういった中で、子どもたちの問いを立たせるところが課題で、難しい。今年は教員も子どもたちと同じような感じなので、講師の先生を呼び勉強しようという話があった。<br>この夏休みは、人事交流で兵庫教育大学に行っている教員がいるので、先行して取り組んでいる学校の事例を教師にガイダンスをしようというところである。まずは子どもたちの前に教員の勉強を進めようとしている。 |

| | |
|---|---|
| | ただ、日々、いろいろなことがあって研修が進んでいないので、この夏にもう少し校内研修の時間をとって２学期から具体的に総合的な時間で探究学習を各学年毎に進めていこうと思っている。<br>昨年度の事例でいうと１年生が、同じ中学校区の小学校ですでに探究を進めている学校があり、その子どもたちが中学校に上がってきているので、小学校で取り組んでいた探究学習を経験した子どもたちがある意味、他の生徒に対してよい影響を与えている。調べ学習だけではなくて、校外に出てインタビューをしたりして、最後には３学期にグループ毎に披露、保護者にも見に来ていただいた。<br>本当に試行錯誤しながらというところで、うまくいっているかどうか、もっと頑張らないといけないが、私が昨年度感じたことは、教師たちが探究学習を進めていくときに、教師もすごく生き生きして会話も増えて、こういうふうにすればいいのではないかとか、もっとこうしたらという会話が職場で聞こえて、最終的にその学年はうまくいったのかと思っている。<br>全てがうまくいくとは思っていないが、どれが正しいのかということを教師も勉強というか、なかなか中学校で探究学習が進んでいるところがなく、今取り組んでいるところなのでこれからかと思っている。 |
| 議長 | 基本的に今は、総合的な学習の時間で行っているということか。 |
| 委員 | そうである。ただ、各教科の中でも探究的な学習というところで教科独自の取り組みもされている。ただ、グループ毎、あるいは学年単位となっていくと総合的な学習の時間しか使えないかと思っている。 |
| 議長 | 教育課程の話になってくる。私が知っている範囲で補足すると現行と次の違いは、課題発見と解決学習で、従来の調べ学習というのは解決学習であるが、そうではなく課題発見からで、何が課題かを設定して、それを深掘りしなさいというのが次の狙いである。課題発見、課題解決学習にバージョンアップしている。<br>それは、総合だけでなく全教育課程においてやっていく。<br>ただ、小学校の場合は、教科担任制がベースなので、総合的な学習を核にしながら川西市がやればよいので、総合的な学習でやっていることを国語や社会でやればいけるが、中学校、高校の場合は、カリキュラムをマネジメントしていかないと、やる人だけやっているみたいなことになってしまうというようなところがある。<br>個人的な感想でいうと、ゆとりの時間が出てきた1988年の学習指導要領の時もこのような感じだった。空き時間を作って余裕のある時間を捻出して各学校でやりなさいということである。その時に宝塚北高校で経験している者としては、二の舞にならないか非常に危惧をしている。文部科学省も経験をしているので、そうならないように綿密に進めているが、現場感覚としてどうなのか。学力低下を引き出した1998年の学習指導要領にいってしまうが、担当はどういう思いがあるのか。 |

| | |
|---|---|
| 担当所管 | 学習内容が骨抜きになっていくような危惧も一定あるのは事実だと思う。ただ、これからの学習指導要領で大きく変更されるのは、本来教科の学習は標準授業時数が定められていて、毎年「何年生は算数何時間しましょう」と決まっているが、これも学校の裁量で一定程度増減してもよいというような仕組みに変わると言われている。そうなると、どこに何に力を入れるかは学校裁量でも一定できるようになってくる。<br>それが、探究的な学習とつなぎ合わせたときに、先ほど委員がおっしゃられたように、例えばテーマの中で国語の領域とか算数の領域とかで関係性があるものだったら、そことマッチングさせて学びを深めていくということができるようになっていて、特に力を入れたいことが国語であれば少し国語に分厚めに時間数をつけるということもできるようになっていくということなので、学校ができる幅が広がるといえば広がる。一方で、それを骨抜きにしようと思えばできてしまうという懸念点もある。<br>そのため、私たちは次期学習指導要領の目指している姿をしっかりと学校に伝えていって、そうならないように、次期学習指導要領が実施される 3 年前ではあるが、このような説明をして伝えてきている状況で、探究が柱になって探究が始まってしまうという前にしっかりと探究をやっていくことを目指している。 |
| 議長 | それでは、他の委員から基本的なことも含めて質問はないか。川西市は次期学習指導要領の改定を見越して、先んじて取り組んでいるがそうした取り組みについて質問などないか。 |
| 委員 | 川西市は、全校にコミュニティ・スクールを導入していると伺っている。<br>今、話を聞いた中で地域の人との関わりが全く見えず、今日、教育委員会の中で完結しているようにしか受け取れなかったが、コミュニティ・スクールの仕組みを使いながら子どもたちの探究の意識を高めるために、選択肢を増やすなどの取り組みをされているのか聞きたい。 |
| 担当所管 | 探究的な学びについて、教育委員会としてはこういう学び方がありますよというところまではお伝えしているが、個別的にどのように取り組んでいくかは各学校の裁量だと思っているので、あまり細かく学校運営協議会と繋がっていきましょうというところまでは、前提として伝えてはいないが、その工夫の中で昨年度まで探究的な学びについて川西市教育委員会が指定をして研究実践をしていただいた学校では、まさに学校運営協議会の委員と協力して、地元の民間企業であるとか、地域の方たちの力を借りて、子どもたちが設定したテーマに親和性のある方を講師に来ていただいたり、ゲストティーチャーに来ていただいたりして取り組まれていた。<br>また、今年度指定した牧の台小学校でも地域共創探究ということを掲げて学校運営協議会の委員から繋がりを広げていただき、地域活動が深まっていくような仕組みで探究をされている学校もある。<br>今申し上げたのはモデルケースであるが、それが市内の学校で広まっているかと |

| | |
|---|---|
| | 言えばまだまだで、増えてきたらいいという段階であるので、モデルケースをしっかり各学校にお伝えし、学校運営協議会との繋がりであるとか、広め方みたいなものが各学校に浸透していけばいいと思っている。 |
| 委員 | 社会教育委員なので、地域学校協働活動というのは社会教育の部分になってくると思うので学校教育と協働する部分が総合学習のところで小さくても大きくてもいろいろな形で入ってきていると思う。それを探究の方にも使える相手が企業であったり、商店であったり、商工会であったりと繋がるところを教師の知らないところを学校運営協議会の委員は知っていると思うので、そういうところをもっと活かしていけば、もっと伸びしろがあると思うので、これから進めていく上での選択肢だと思う。折角の仕組みなので学校運営協議会と協働してやられたらよいと思う。<br>それをうまく行っているのが、私が 8 年間関わっているところであるが、大阪府の富田林中学校、高等学校で、よかったらずっと関わっているので、視察に来ていただければ、コーディネーターがコーディネーターズということで、学校のニーズに合わせて企業を繋いでいて、コーディネーターズがアポを取り、決定までしていただき、教師は決まったところにメールでやり取りをし、学校の授業を進めていく上で、必要なもの、ニーズをお伝えするもので、教師の働き方改革にも繋がる活動をしているので、視察に来ていただければよいと思う。いろいろなところに視察に行かれているが、近いので来ていただければと思う。 |
| 委員 | 自分自身がもう子育ても終わってしまって、学校教育とは少し遠いところにいる感じではあるが、保護者とか自分自身もであるが、探究の学習とは何か。総合的な学習とは何かみたいな感じで、説明を受けても何か上っ面でわかるような気もするが経験していないことなので、少し入ってこないところがあり、若い教師の方々は経験が結構あると思うが、年配の教師の方々はそうでもないのかと思ったりする。もちろん子どもが主体というのはあるとは思うが、保護者の理解であるとか、地域の方の理解とか、どうすれば進むのかと思う。学校運営協議会で進めていくというのはあるのだろうけれど、どのように理解していけるのかと思ったりする。 |
| 議長 | 総合とは何をしているのかイメージしにくい。 |
| 担当所管 | 総合的な学習の時間は過去からあるが、それが川西市で根付いてきたかというと正直なところ課題が大きくて、あまり取り組みが進んでこなかったという反省はある。<br>例えば、よく行われている行事であるとか、イベントであるとかが総合的な学習の時間の一つに位置付けられてきたことも少なくない。一方で子どもたちが何かテーマを決めて深掘りしていこうと考えたときに、これだったらできる、あれだったらできるというようなことは、世代が関係なく取り組めるようになってきたと思っているが、保護者であったりとか地域の方にこういうものを進めていこうというのは、短時間でお伝えするのは難しいのが実情かと思うので、学校運営協議会の委員 |

| | |
|---|---|
| | に説明したり、先ほどモデルで説明した学校では、保護者説明会を開いたりして取り組まれているので、私たちも情報発信をし、こういう形でやっていこうと思っていることを伝えるのが大事であると思っている。 |
| 議長 | 学校の特色化に進むのかと思う。高校が探究でうまくいったのは、学校の特色化がうまく使われているからである。中学校は、何とかできるだろうが、小学校は本当にできるのだろうかという感想であるが、どうだろう。 |
| 担当所管 | 各教科は、学習指導要領にある程度やらないといけないことが決まっているが、総合的な学習の時間というのは、まったく決まっていない。学校が独自に決めることができる。これがまさに特色で学校教育目標とか子どもたちの姿や地域の実態から引っ張ってやれることは総合的な学習の時間なので、学校の独自性が生かされるところではあるが、独自性が生かされるあまり、なかなか取り組めなかったりすることが課題になったりすることもある。 |
| 議長 | 情報の時間が授業に入っていくことになるが、その点はどうなのか。次の学習指導要領で情報が入ってくると言われているがどうだろう。 |
| 担当所管 | 次期学習指導要領では、総合的な学習の時間の中に情報の領域というものができるとなっていて、中学校では今までは技術家庭科ということであったが、仮称ではあるが情報技術科になって、家庭科が独立するということが方向性で示された。<br>先ほど、AI の話もさせていただいたとおり、情報というものの扱いであったり、情報活用能力の育成といったことがすごく必要になってくると国でも議論されており、情報活用能力も含めた今後の学習指導要領の充実というものが必要と示されているので、情報の領域というものが小学校でも初めて明記され、中学校では教科として位置付けられるという流れになってきている。 |
| 議長 | 誰でもタブレット片手に調べ学習をやりなさいという感じである。 |
| 担当所管 | GIGA スクール構想で国費で非常に大きなお金を使い、一人一台端末を配備している以上、そのデジタル端末の活用、情報活用能力の育成というものは、文部科学省も財務省に説明する材料として必要なのだと思うので、デジタル基盤をしっかりと小学校段階からやっていきましょうということだと思う。 |
| 議長 | 高校の情報科に合わせて逆算で小学校もやりなさいということだと思う。 |
| 担当所管 | 高校の情報科というものは前から出来ていて、それに対してどうアプローチしていくかであるが、突然高校で情報科というものが現れる。それを考えると中学校の技術科の中に情報分野というものがなかったが、しっかりと情報というものを位置付けてやっていこうというのが流れである。そして、その能力を活用して探究をや |

| | |
|---|---|
| | っていこうというようになっているので、デジタルを活用しながら、どんどん探究をしようというのが国の考え方としてある。 |
| 副議長 | 今から 3 年後に文部科学省がやろうとしているものを川西市は先だってやるという考えの基に今、話を聞いたということだと思うが、先ほどから探究という言葉が出てきているが、3 年後に探究の部分はそれ以前の総合学習の時間が探究になるということの流れの中の探究であれば、今回 2 年間を掛けて探究だけを考えればいいのか、昨年まで協議した、川西市は地域の力も必要であると考え方としてまとめて、今後どうするかという問題があるわけである。<br>今回、探究となると、前回の部分と探究を地域的なものとのリンクを教育保育課としては、どのような方向性に持っていきたいか何か思いはあるのか。 |
| 担当所管 | 探究学習について説明をさせていただくために報告させていただいたので、研究テーマについて申し上げづらいところではある。社会教育委員の会で、この探究のテーマについて、どのような経緯で設定をされて教育保育課がどう関わっていくかは申し上げづらいところではあるが、ただ、委員の質問からでは探究学習ができるのは、次の学習指導要領からというのではなく、名称として初めて位置付けられるだけで、総合的な学習の時間の材料としては、これまでもずっと探究というのは出てきているし、今も学習指導要領の中にも位置付けられている。ただ、分かりづらいので名称も探究にしましょうということであるので、これまでから取り組まれてきた探究というものをさらに深めていこうとしているのが次期学習指導要領である。<br>川西市では、今まであまり取り組めていなかったので、先ほど委員もおっしゃっていた学校運営協議会や地域といったところと社会教育としての関わりを持たせながら、探究学習でどう深められるか委員の皆様から示唆をいただきたいと思っているので、探究的な学習だからこうやっていきたいというよりも、社会教育委員の皆様の立場から示唆いただければと思っている。 |
| 議長 | 「探究学習における社会教育の関わり方」は研究テーマなのでよいのだが、探究学習という言葉は固有名詞なのか普通名詞なのか。 |
| 担当所管 | 文部科学省では、「探究」というものと「探究的な学び」というものがあって、うまく棲み分けられていない。文部科学省も整理ができていないと自覚されていて探究と探究的な学びをめぐる総合と各教科の関係についての資料を作っていて、一応、総合的な学習の時間で取り組む探究学習のことを探究と呼ぼうとしている。先ほど委員がおっしゃられていた各教科の中で取り組める探究的な学習みたいなものが探究的な学びというように位置付けられている。それで、探究に取り組む学習活動のことを探究学習というようなイメージである。 |

| | |
|---|---|
| 議長 | そこを限定しておかないと話が拡散してしまう。また、今の話は小中学校で幼稚園はどうなのか。 |
| 担当所管 | 基本は小中学校である。 |
| 議長 | 小中学校、特別支援学校における探究的な学習の充実に向けた社会教育の関わり方と考えればいいのだろうか。 |
| 担当所管 | 最初に委員がおっしゃっていただいたところが、まさにそうだと思うが、学校の中でできる範囲は限られると思っていて、学校教育とはどうしても狭い範囲の中で、探究学習をするにしても地域に飛び込んでいったり、企業に飛び込んでいったりするのは難しい。そこに繋いでいく役割としてコミュニティ・スクールがまさに要だと思っているので、そういう関わり方も委員の皆様から示唆いただければありがたいし、探究のテーマになりやすいのが地域課題で地域をよくしたいとか学校をよくしたいとか、そういう課題が探究のテーマになりやすい。<br>そうすると、どういう地域課題からアプローチしていくのが探究学習の充実に繋がるのかみたいなことが、学校サイドからすると知りたいだろうと思っている。<br>探究学習の充実というと幅の広い話になってしまうので、社会教育の視点で見たときに、こういう切り口でできるのではないか、こういうテーマであればより探究が充実するのではないかとか、探究を充実させるためには、地域の力が必要だろうと示唆いただけるのが、いちばん親和性としてよいと思っている。 |
| 委員 | 現役を離れて６年になり、浦島太郎的な感覚で話を聞かせていただいた。探究によって、一番ベースになるところを小学校でしっかり育ててほしいという保護者の願いでもあると思う。この探究的な学習は、今まで足りなかったから現場としてありがたいのか。子どもを中学校に送り込んでいくにあたり、現場として、よいところがあるかないか。 |
| 担当所管 | 両方ある。今まで取り組んできていないことに対して、少し力を入れて取り組まないといけない負担感は全くないということはないと思う。一方で一つの材料としてお伝えしているのが、なぜ文部科学省がここまで探究にこだわるかというと全国学力・学習状況調査の中で学力テストの結果自体も探究学習をしっかり取り組んでいる学校や子どもたちほど学力の推移も非常に有効であるという相関関係として示されている。つまり探究的な学びというのは、子どもたちの学力にも影響がありそうだということが見えてきている。<br>必ずしも直結するとか、学力を上げることだけを目的ではなく、そういった関係性もあると教師には伝えていて、そこから教師も興味を示しながら、探究的な学習は子どもたちの学習意欲や学力に繋がっていけるように取り組めたらよいということまでは、現在教師とも共通理解ができてきたと思っている。 |

| | |
|---|---|
| 委員 | 社会教育委員として、ここに座っているが社会教育の視点からどのようにサジェッションできるのか非常に難しいというのが正直な気持ちである。 |
| 委員 | コミュニティ・スクールを進めていけば、絶対にできると思う。<br>全国にたくさん事例もあるし、小学校の総合の部分に自由度を高めていくわけで、過去からの詰め込み学習でなく、小学校の基礎基本はしっかり教えていただくことをベースに、個性があって多様性がたくさんでてきている。学校の授業であったり、学校であることがどんどん見えてきて、そこを受け止めることも含めての探究である。<br>探究という言葉を使うから余計にややこしい。子どもが興味を持ったことを生かしてあげようとして、それが一人ひとりのものになるとまた、教師が大変で、三十何人いたら 30 種類のことをしないといけないのかと言えば、そういうことを求めているわけでもなく、どういうものなのかをもっと保護者に知っていただき、子どものプラスになる部分を引き出す授業をするということ。それぞれの子どもたちの持っているプラスのところが生かされるように授業がなっていくということである。<br>大阪のある学校では授業時間を変えて、午後の時間を探究の時間に時間割を作り替えているところもある。それが校長の裁量でできるようで、そこで子どもたちも生き生きと頑張っていると話を聞き、実際に見させていただいたりしたが、いろいろなパターンの学校が出てきて、今までの指導要領とかガチガチに決められてきたものから自由度があるというところから始めて、そこにコミュニティ・スクールの学校運営協議会の委員たちのネットワークであったり、その方の入っている団体のいろいろな方であったり、知り合いであったり、教師も協力して一緒に事業を作り上げていくポジションになっていただけるよう組み立てていくと可能なものになるし、学校一つ一つの特色も出てきて、教師もやる気がでて、有効なものだと思っている。すごく楽しみにしているし、社会教育として協力できるところは意見やアイデアを出し合っていけたらよいと思う。 |
| 委員 | 池田市であるが、青少年の社会教育施設である文化センターを管理している。そこに来た高校生が、置いてあるピアノを弾いて帰って行くという関わりから始まり、話をしていくうちに、その子どもが針金で恐竜を作り、とてもリアルな模型を作るのが好きだとわかった。今の小学生も恐竜が好きな子はたくさんいるから、先生になって、それを作る講座をやらないかと言うと、講座を一緒に企画してくれた。<br>そういう経験を通じて話をしていると、受験で学校を決めないといけないけれど、学校からは学力がこれで偏差値がいくらだから、どこの学校に行くのかという話にしかならず、将来を夢見て考えられない、こだわりがあって決められないと止まってしまっていた。それが、自分の好きなことをやってこんなにも興味を持ってもらえる、そのことで語り合えるということがあり、偶然、恐竜博物館の方と話をする機会もあったので、結局、学力ではなく好きなことで道を選ぼうと思えたといって、生物学を選んで大学に進学した。 |

| | |
|---|---|
| | なぜ学ぶのかというところで、多くの子どもたちが「好き、知りたい」という、その純粋な興味から学んでいくことがなかなかできなくなってしまった教育社会構造の中で、今回原点に戻るというか、好きと知りたいで関わっていく新しい学びのスタイルを子どもたちに作っていってあげるのは、本当に大事だと思って聞いていた。<br>そうなったときに、成功しているなと思うのが、川崎市のフリースクールで「子ども夢パーク」に隣接している「フリースペースえん」という施設があるが、そこに集まった子どもたちが興味を持ったことを調べてやってみようみたいに好きだから趣味を広げていくとか、同じように興味を持った子ども同士で学びを作っていくということをやっていて、世界とも繋がったりしているので、学校でも広がれば多様な学びが保障されてよいと思った。<br>そんな中では何に興味を持つのか、深めてみたいと思うかといったときに、学校という箱の中で止まっているだけでは、絶対出てこないものだと思う。心を開放して生き生きわくわくしたりする中で自分というものが広がったり、経験が増えていく中で、これが好きかもしれないみたいなことがあると思うので、その学校のこの学びを充実させるためには、やはり日常生活の社会教育、地域社会の中での学校でも家庭でもない、地域社会の中での日常の時間、自分の体験の場というものがリンクしていくのではないか、循環していくのではないかと思う。<br>社会教育の側としては、学校教育をどう支えていけるのか考えるのだろうが、一方で川西の子どもたちの教育、生活というものをどう保証していくか、教育環境、育ちの環境をどう保障するかという視点で、その学校の中だけでない日常生活の子どもの場というものもあわせて考えていく必要があると私は考えている。<br>もう一つ、ポンチ絵のところで、生涯にわたって主体的に学び続けながら、民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育むと書いてあり、主体であるということと、民主的な社会の創り手になるという、そこも大切なキーワードかと思った。みんなが自分の人生を歩みつつ、市民として育っていくという、子どもの声を聞くようにはもうなったということであるが、子ども時代から、自分も一主権者として、社会と関わりを持ちながら、他の人と意見を合わせて物事を作り上げていく力を探究で育むということは、合わせて大事だと思った。 |
| 議長 | 教育長の方から報告があったところ、探究学習のメインターゲットである本市の小中学生、この子どもたちに対して多様な、人生選択を含めて学びの場を広げていくために、前はプラットホームを広げる意味で前回であればコミュニティ・スクールというところも含めて、社会教育としてどう関わっていくかという視点で研究していくのかということだと思う。<br>学生の話であるが、総合学習などで結構評判が良かった。高等学校の探究の時間にいろいろやっていたようである。そこは小中学校ではどうだったのかというと正直弱い。ですから、高校の探究で成功している部分を、いかに小中学校でも実現していくか。その時に、高校生は自分達でどんどん外に行けるから、教師も外に繋げやすい。安全面もそこまで配慮は要らない。小中学校はそうはいかない部分がある |

| | |
|---|---|
| | ので、そこはコミュニティ・スクールを含めて、社会教育の方でプラットホームを広げていくというところで質を上げていくツールはあるのかと今思っている。とりあえず私としては、そのような感じで話は来ているかと思う。変わるのかもしれないが、とりあえず本日は、このようなところでよろしいか。<br>　では今回は、本市の先行的な取り組みを聞いて、それに対しこれまでコミュニティ・スクールのことを審議してきたので、コミュニティ・スクールだけではないがコミュニティ・スクールをベースに、小中学生の探究学習、総合学習をとっかかりとした、学びの提供ということで、社会教育がどうコミットしていくかというところを今期のテーマとして引き受けさせていただく。<br><br>**６．全国社会教育研究大会について** |
| 議長 | 6 番、全国社会教育研究大会について、議事を進めさせていただく。まず、事務局から説明を願う。 |
| 事務局 | 資料 6-1、6-2 により、次のとおり説明する。<br>【大会概要（資料 6-1）】<br>・第 68 回全国社会教育研究大会大阪大会として、10 月 28 日から 30 日まで大阪府で開催される。<br>・大会スローガンは「学ぶってオモロイやん　つながるってええやん　地域のことはまかしとき」、研究主題は「多様な人材・資源をつなげる社会教育～学びを社会の活力に～」である。<br>・28 日は理事会のため川西市の参加はない。29 日木曜日午後から全体会として、開催行事のほか記念講演やシンポジウムが行われる。シンポジウムには大谷委員がコーディネーターとして参加されると聞いている。30 日金曜日午前には分科会が行われる。<br>【本市の発表（資料 6-2）】<br>・分科会の一部を阪神北地区が担当し、川西市は第 1 分科会を担当する。テーマは「社会教育委員のネットワークの意義～子どもの生きる力を育む地域教育と社会教育委員の果たす役割～」である。<br>・川西市は、令和 6 年度、7 年度に協議してきた「学校運営協議会制度への社会教育の関わり方」について発表する。発表者は川野麻衣子委員にお願いしている。<br>・資料 6-2 は大会誌の分科会原稿として提出したものである。本会議の前に阪神北地区の案を兵庫県を通じて全国に提出する必要があったため、この内容で提出している。確認をしていただきたい。<br>・原稿は 4 つの構成となっている。一つ目に研究テーマとその設定経緯、二つ目に活動の具体内容として 2 年間の任期中の開催状況、三つ目に成果と課題として、本市のコミュニティ・スクールが双方向の連携協働を目指しているが現状は地域が学校を支援する一方向の関係性になっていること及び双方向とするための指針 4 つ、四つ目に今後の展望として、指針に基づく取り組みにより学校と地域がそれぞれの特性を活かした協働を促し、子どもの多様な育ちを支えるとともに、地域の活 |

| | |
|---|---|
| | 性化にもつながることを期待できることを記載する。<br>・発表者の川野委員には、この原稿に基づいて発表いただくことになるため、今後調整をお願いする。<br>【参加について】<br>・分科会では阪神北地区の各市町がブースを設けて参加者の質問などに対応することも考えておられるため、参加いただく委員の皆様にもブースでの対応をお願いすることになると思われる。<br>・委員の参加については阪神北地区社会教育委員協議会がまとめて報告することになっており、参加者名簿の提出を求められている。令和 8 年 7 月 28 日を期限に参加の有無を報告いただきたい。後日メールで案内するので、返信を願う。<br>・できる限り参加いただきたいが、予算の関係で参加について調整させていただく場合がある。 |
| 議長 | 私は、ご存じのとおり実行委員長をしているので大阪の立場で参加する。大谷委員も大阪府社会教育委員として全体会のパネルディスカッションのコーディネーターをされる。2 日目については、近畿大会であるので 2 府 4 県がそれぞれ分科会を持つということになる。本県の場合は、第 1 分科会というところで、社会教育委員の役割というものが、例年であるが、メイン分科会である社会教育大会であるので、そこのところを阪神北が引き受けて、本市もその一つの柱を構成する。当然調整するが、恐らく 1 と 6 に希望が集まると注目されているので、本市も含めて阪神北もしくは県と協力して、良い形で全国の方をお迎えして、しっかり川西を売っていきたいと思う。川野委員には無理を申し上げるが、しっかり PR していただきたい。<br>では一応全体については、この形で進めさせていただく。 |
| 議長 | **7．その他**<br>委員の皆様から何かあるか。それでは、皆様に協力いただいたので、時間内に終わることができた。これをもちまして、第 1 回社会教育委員の会を終了する。 |